

海外食料需給レポート

(2021 年 6 月)

令和 3 年 6 月 30 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2021 年 6 月の主な動き・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	2021 年 6 月の穀物等の国際価格の動向・・・・・・・・	2
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント・・・・・・・・	2
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント・・・・・・・・	2
V	今月の注目情報 豪州、カナダの作付け動向・・・・・・・・	3

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向・・・・・・・・・・・・・・・・	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移・・・・・・・・	8
3	令和 2 年 12 月以降の食品小売価格の動向 ・・・・・・・・	9

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	とうもろこし・・・・・・・・・・・・・・・・	8
3	コメ・・・・・・・・・・・・・・・・	1 3
II	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・	1 9

【利用上の注意】

(概要編)

I 2021 年 6 月の主な動き

1 乾燥の影響を受けたブラジルの冬とうもろこし

2020/21 年度の大豆の作付けが乾燥の影響で遅れ、収穫も遅れたため、収穫後にその圃場に作付けされる冬とうもろこしの作付けも遅れた。その結果、4 月～5 月にかけて生育期から成熟期の降雨不足の影響を受けた。ブラジル食料供給公社 (CONAB) の 6 月見通しでは、生産量は、前月から 1,000 万トン下方修正され、前年度より 6 % 減の 9,600 万トンと見込まれている。

なお、この減産に伴い、地域的な在庫の偏りもあることから、不足する国内飼料用とうもろこしをパラグアイに加えアルゼンチンから輸入することになった。また、米国産 GMO とうもろこしの輸入が承認された。

写真：ブラジル パラナ州のとうもろこし
(6 月 5 日撮影)



2 ロシアの穀物輸出税の動向

ロシアは 6 月 2 日から、今まで小麦やとうもろこし、大麦に対して賦課していた輸出税に関し、輸出価格に対応した可変輸出関税を導入した。品目別に定められた上限価格とノボロシスク港の輸出価格との差を毎週算出し、その 70% を賦課する方式。

6 月第 1 週に設定された輸出税は、以前と比べて小麦(28.1 ドル/トン)は引き下げ、とうもろこし及び大麦は引き上げとなった。USDA によれば、2021/22 年度のロシアの小麦は、冬小麦が春の降雨に恵まれ、全体で生産量は 8,600 万トンと史上最高が見込まれている。7 月以降の新穀の収穫により、小麦の輸出が活発化するとみられる。

また、大豆については、7 月以降 30%(最低 165 ユーロ/トン)の輸出税を 20%(最低 100 ユーロ/トン)に引き下げることを選定した。これを受けて極東連邦管区で栽培されている大豆に関しては、隣接する中国向け輸出が活発化するとみられる。

3 順調な中国の穀物の生産状況と旺盛な輸入

5 月末から 2021/22 年度の冬小麦の収穫が開始された。中国農業農村部の発表によると、冬小麦の作付面積は 2,230 万ヘクタールで、前年度より 20 万ヘクタール増加する見通し。天候に恵まれ作柄は良好となっている。

一方、東北地区を中心にコメやとうもろこし、大豆の作付も天候に恵まれ順調に開始され、降雨に恵まれ生育状況はおおむね良好である。

なお、中国の旺盛な穀物輸入は継続しており、商務部の「対外貿易形勢報告(2021 年春季)」(2021.6.9)によれば、2021 年 1-4 月の穀物等の輸入について、大豆は対前年同期比 16.8% 増の 2,863 万トン、大豆に加えとうもろこしや小麦、芋類などを含む穀物・豆類・芋類計で同 57.8% 増の 5,079 万トンとなっている。逆算すれば大豆を除いた穀物・芋類等の輸入は、2.9 倍となっている。

写真：中国 山東省の小麦の収穫
(6 月 8 日撮影)



Ⅱ 2021 年 6 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、5 月末、240 ドル/トン台前半で推移。6 月に入り、米国プレーンズ北部の春小麦生産地域の高温・乾燥天候に下支えされ、240 ドル/トン台後半から 250 ドル/トン台前半で推移したものの、中旬以降、同地域で降雨があったことや、世界的な小麦の増産見通しや、とうもろこし、大豆価格の低下から値を下げ、6 月下旬現在、240 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、5 月末、260 ドル/トン前後で推移。6 月に入り、米国中西部の高温・乾燥による生育への影響懸念、ブラジルの降雨不足による冬とうもろこしの減産懸念等から 6 月上旬に 270 ドル/トン半ばまで値を上げた。その後、米国中西部の乾燥地域への降雨や生育の順調な進展等を受けて値を下げ、6 月下旬現在、260 ドル/トン前後で推移。

コメは、5 月末、500 ドル/トン前後で推移。6 月に入り、コンテナ不足や高騰する運賃への懸念、パーツ高などからタイ産へのアフリカからの需要が低調であることから値を下げ、6 月下旬現在、460 ドル/トン前後で推移。

大豆は、5 月末、560 ドル/トン台前半で推移。6 月に入り、米国中西部の高温・乾燥による生育への影響懸念や米国のタイトな大豆需給、大豆油価格の上昇等から、6 月上旬に 580 ドル/トン前後まで値を上げた。その後、収穫が終了したブラジルの豊作見通しや米国中西部の乾燥地域への降雨、生育の順調な進展等を受けて値を下げ、6 月下旬現在、520 ドル/トン台前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 730 万トン上方修正され 28.0 億トン。消費量は、前月から 450 万トン上方修正され 28.0 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.0% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され 28.0 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から小麦、コメは上方修正、とうもろこしはわずかに下方修正され、穀物全体で上方修正され 28.0 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から小麦、コメで上方修正され 5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は前月から下方修正された。。

(注：数値は 6 月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、17.0% となる見込み。

(注：数値は 6 月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:豪州、カナダの作付け動向

2020/21年度の豪州は天候に恵まれ、小麦は史上最高の豊作となった。一方、カナダも小麦については、過去2番目の豊作となった。2021/22年度は、豪州は秋の降雨に恵まれ、小麦を初め冬作物の作付けが順調に進展している。一方、カナダでは、油糧種子の国際価格が高いため、小麦から菜種や大豆に作付けがシフトした。

両国の状況をまとめた。

1 豪州の2021/22年産の作付け・生産動向

6月8日に豪州農業資源経済科学局(ABARES)が公表した穀物レポートによれば、

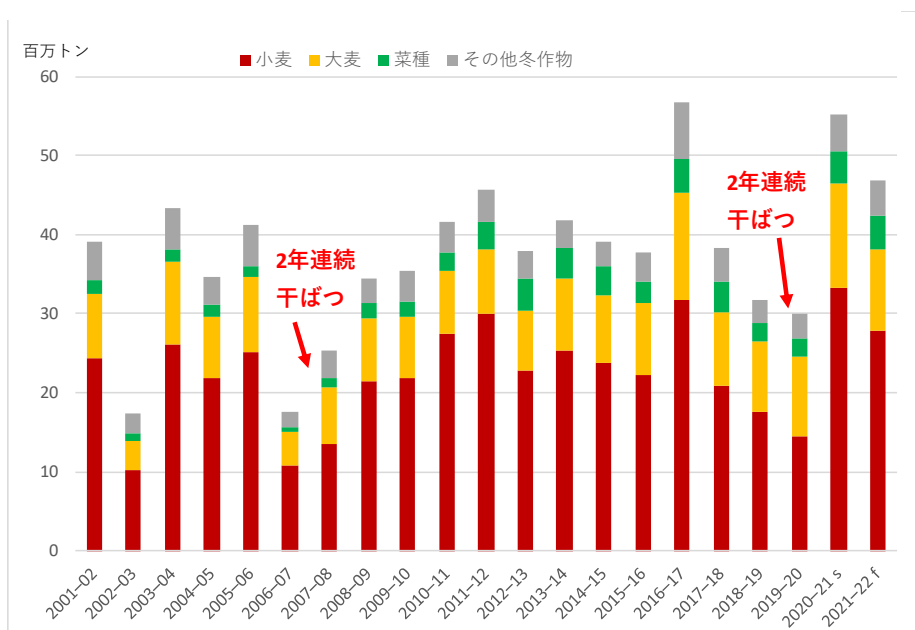
2021/22年度の秋の冬作物の作付けは降雨に恵まれ順調に進展し、穀物等の国際価格の上昇により作付面積は増加している。小麦については、作付面積が前年度より1%増加し、生産量は、作付け開始時点の数値ではあるが、前年度より17%減も過去10年平均を15%上回る2,780万トンの見込み。大麦は前年度を21%下回るも、過去10年平均を7%上回る1,040万トンの見込み。菜種は、特に油糧種子の国際価格が高騰していることから作付面積は25%増加し、過去10年平均を22%上回り、生産量も前年度よりさらに4%増加し420万トンの見込み。冬作物全体で4,680万トンとなり、史上2番目の豊作であった前年度よりは減産となるものの、過去10年間で比較して高水準となる見込み。

また、収穫がほぼ終了した2020/21年度の夏作物に関しては、2年連続の干ばつの影響から回復する見通しとなっている。ソルガムは史上最低の生産量であった2019/20年度の40万トンから150万トンに増加するものの、過去10年平均よりは2%下回る見通し。主に南東部のニューサウスウェールズ州で栽培されているコメは、灌漑用水の供給増により2019/20年度の5万もみトンから46万もみトンへと大幅に増加する見込み。

写真1 豪州 ニューサウスウェールズ州の小麦圃場(5月24日撮影)
コメの収穫後に小麦作付け。降雨に恵まれ初期生育は良好。



図1 豪州の冬作物の生産量の推移 前年度より減少も高水準の見通し



出典: ABARES 「Crop Report」(2021.6.8)

州別には、前年度、生産量が史上最高となったニューサウスウェールズ州では、2月の降雨量が平年以上、3月は平年の倍となるなど、土壌水分が潤沢となり、小麦については、単収が史上最高となった前年度よりは減少するものの 890 万トンと高水準の見込み。なお、一部でネズミによる貯蔵穀物への被害が報告されている。

一方、西オーストラリア州では、理想的な天候となり、小麦については、作付面積、単収とも前年度を上回り、生産量は 1,000 万トンと前年度より増加する見込み。

2 カナダの 2021/22 年度の作付け・生産動向

カナダ農務農産食品省 (AAFC) の 6 月見通しによれば、小麦の作付面積は 940 万ヘクタール (対前年度比 7.7%減)、菜種は 870 万ヘクタール (同 3.6%増)、大豆 220 万ヘクタール (同 5.5%増)、とうもろこし 150 万ヘクタール (同 1.7%増) となっている。油糧種子の国際価格が高いため、小麦から菜種などへ作付けがシフトする意向が反映されたとみられる。

なお、小麦の中で、デュラムを除く春小麦と冬小麦の計で 710 万ヘクタールと前年度より 10%減少も、デュラムは世界的にも需要が高く、前年度より 0.1%増の 230 万ヘクタールとなっている。

生産量については、小麦は 3,110 万トン (うちデュラム 600 万トン) と前年度より 11.7%減少も、菜種は 2,010 万トンと同 11.0%増加し、大豆は 620 万トンと同 2.1%減少も、とうもろこしは 1,390 万トンと同 2.5%増加する見込み。穀物、油糧種子合計では、8,870 万トンと前年度より減少も、高水準となっている。

カナダの小麦や菜種は主に、西部の平原州 (アルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州) で栽培されており、作付けは 6 月に入りほぼ終了した。特に東部で乾燥していたが、6 月中旬に地域によって 25~100 ミリの降雨があった。

一方、とうもろこしや大豆は、米国のコーンベルト

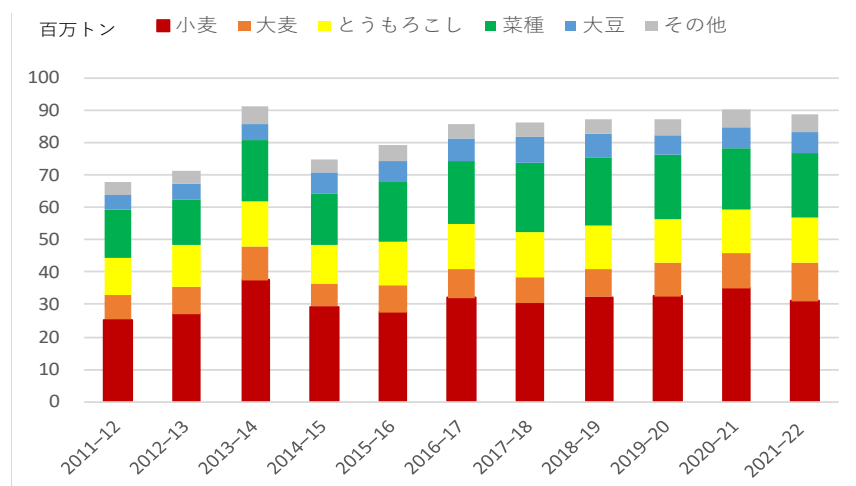
と隣接する東部のオンタリオ州、ケベック州で栽培さ

れており、6 月までに作付けは終了した。6 月中旬時点で、生育期を迎えているが、気温が平年より 4 度から 7 度高い状況となっている。オンタリオ州西部から中部では、5~25 ミリの降雨があったが、オンタリオ州東部、ケベック州では乾燥が続いており、とうもろこしや大豆には降雨が必要とされている。

写真 2 カナダ マニトバ州の小麦圃場
農薬の散布を実施。(6月9日撮影)



図 2 カナダの穀物・油糧種子生産量の推移 前年度より減少も高水準



出典：カナダ農務農産食品省 (2021. 6. 18)

3 国際需給への影響

豪州、カナダの小麦輸出が世界に占めるシェアについては、豪州は干ばつからは回復したものの、近年、ロシアやウクライナの小麦の輸出増に伴い低下している。2012/13年度は豪州、カナダとも各14%のシェアがあったが、2021/22年度は、豪州10%、カナダ12%に低下する一方、ロシアは逆に8%から20%へと大きく伸ばし、世界1位の輸出国となっている。ただ、豪州については、2020/21年度が豊作となったため、2年連続干ばつの影響により旧ソ連諸国に奪われていた、東南アジア向けの輸出市場を取り戻したと見られている。

一方、菜種の輸出量については、カナダが6割と引き続き大きなシェアを占め、ウクライナと豪州が2位争いをしている。

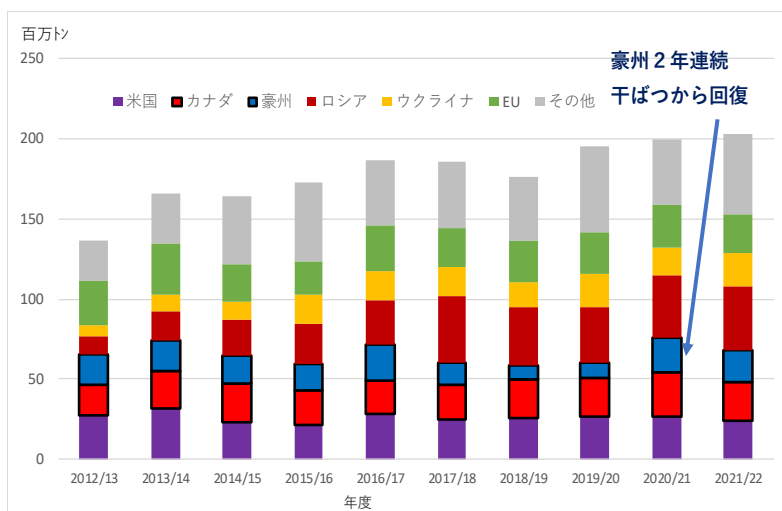
菜種の国際貿易については、輸出国の多い小麦と比較して、カナダのシェアが突出して高いため、カナダの生産動向に大きく左右される。なお、菜種の貿易量が大豆の貿易量の約1/10で、大豆の主要輸出国のブラジル、米国や貿易量の6割を輸入する中国の需給動向の影響を受けやすい。

昨年後半からの中国の輸入増や南米の乾燥懸念による大豆相場の上昇を受け、菜種の国際価格も上昇した、

6月に入り、穀物相場は、米国の作付け、生育の進展や南米の大豆の収穫進展、2021/22年産の小麦の豊作見通しを受けて、高騰した5月前半の水準よりは下落したが、依然として高水準である。

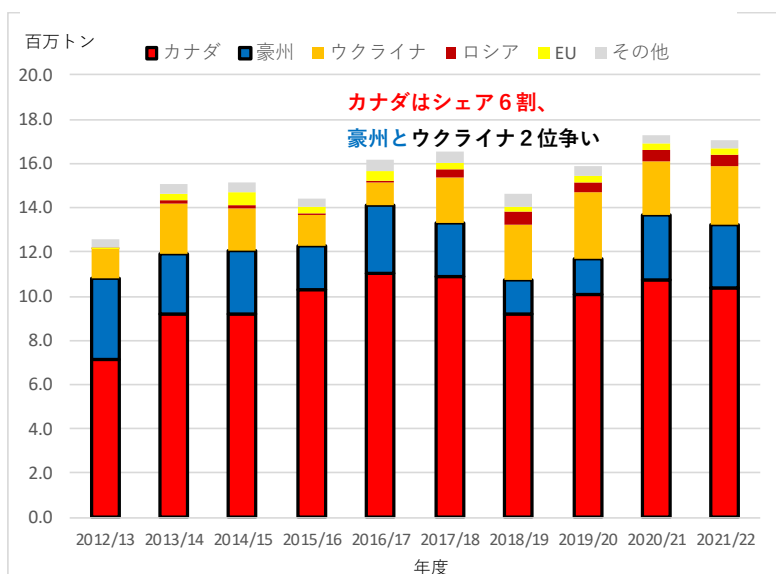
豪州やカナダは、我が国の小麦や菜種等の主要輸入先でもあり、今後、主要作物が生育期から成熟期を迎える両国の動向について引き続き注視していく。

図3 世界と豪州、カナダの小麦の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2021. 6）

図4 世界と豪州、カナダの菜種の輸出量の推移

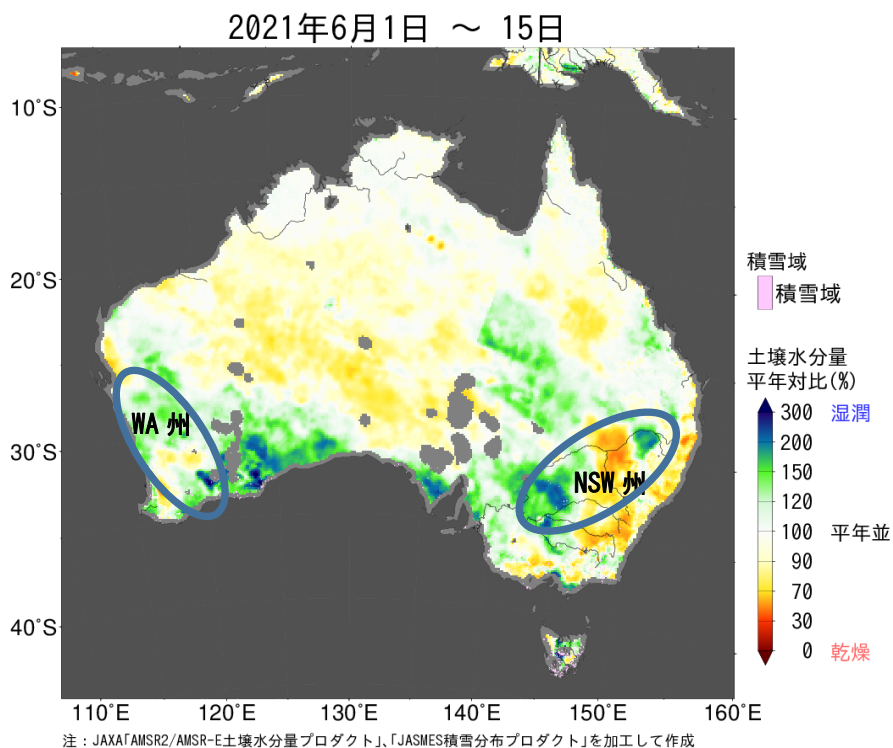


出典：米国農務省「PS&D」（2021. 6）

(参考) JASMAI データによる 6 月前半の豪州と北米の土壤水分量平年対比

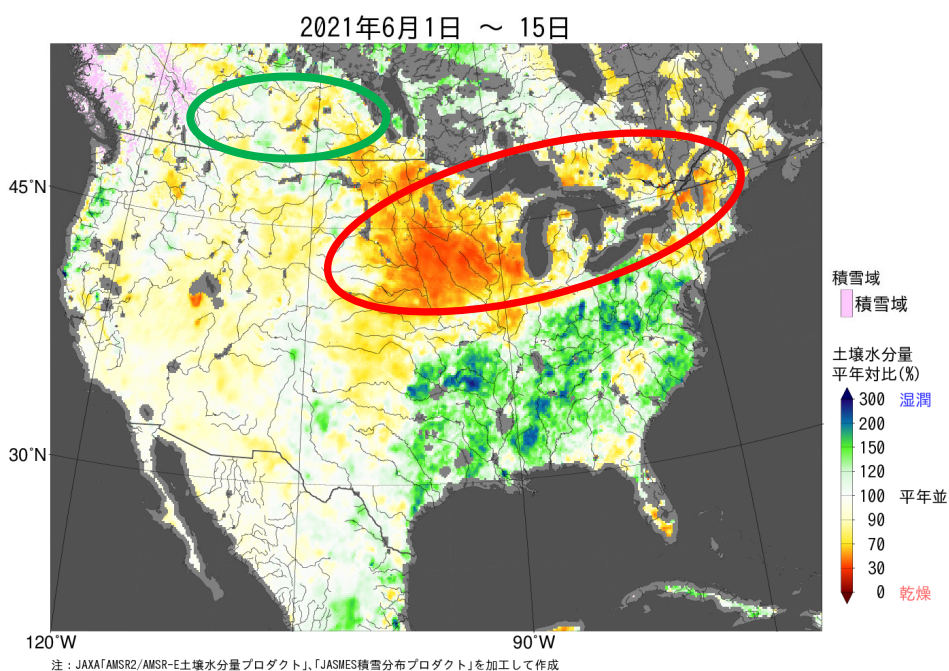
(1) 豪州

西オーストラリア (WA) 州、ニューサウスウェールズ (NSW) 州とも穀物主産地 (青丸) の土壤水分量は概ね平年並みか平年を上回っている。



(2) 北米

カナダ西部 (緑丸) は平年並みであるが、米国コーンベルト北部からカナダ東部 (赤丸) にかけて土壤水分量は平年を下回っている。



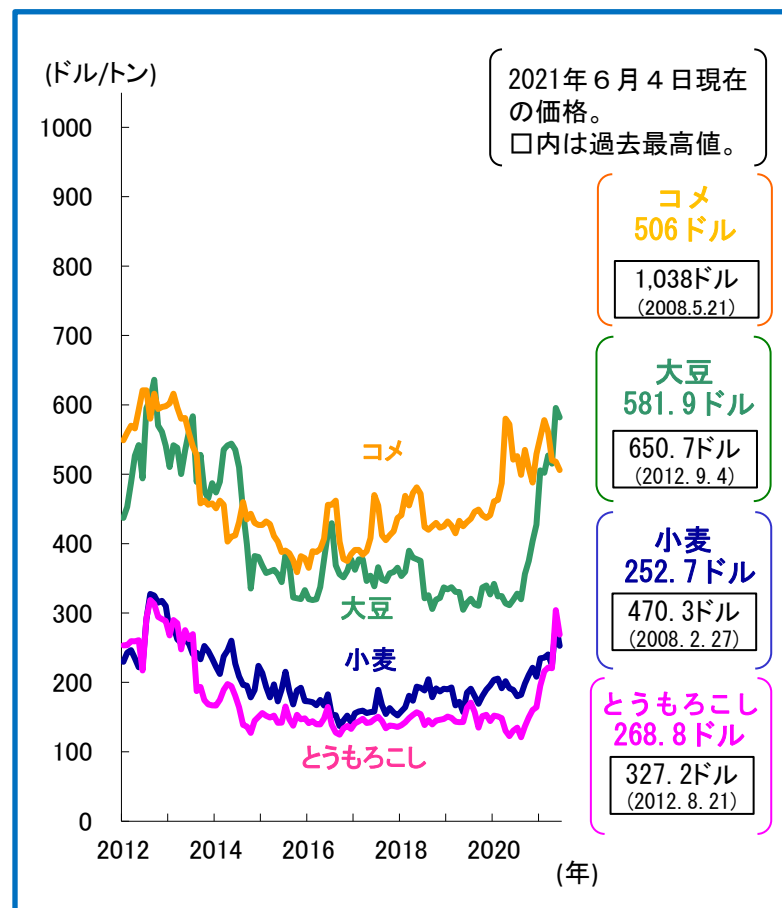
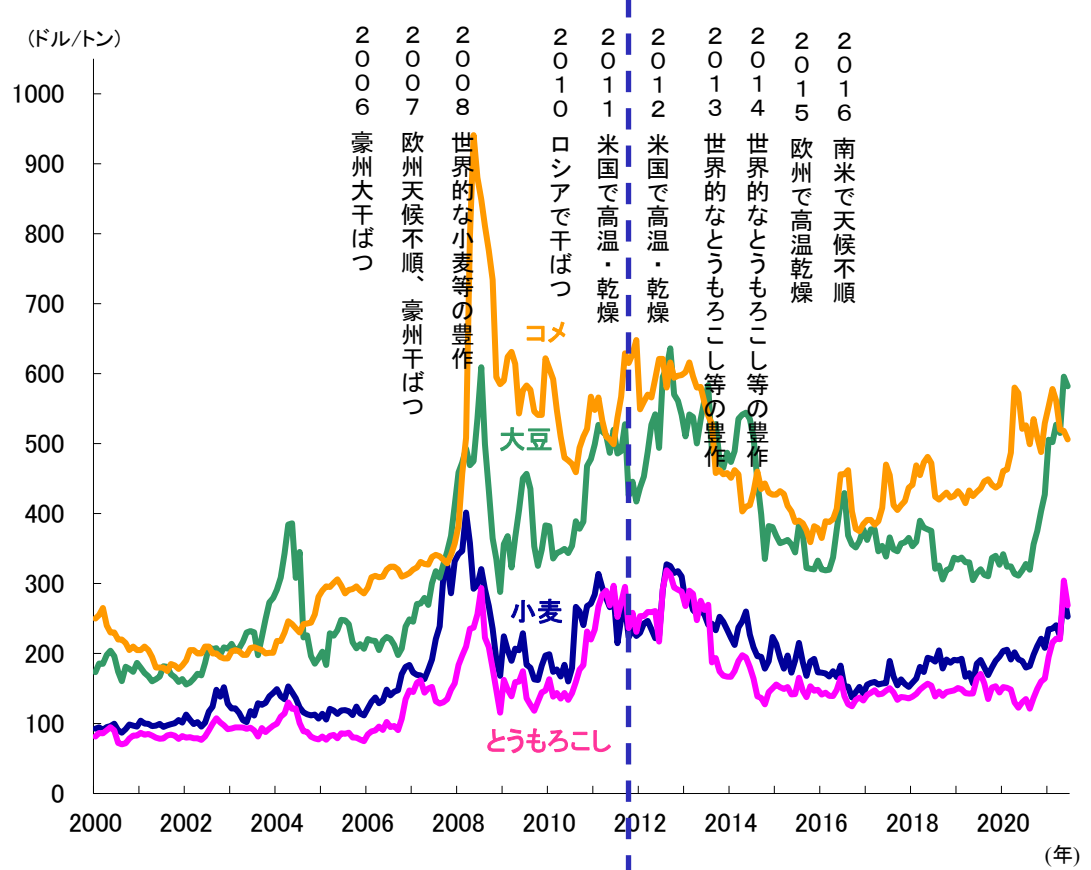
資料: 農林水産省「農業気象情報衛星モニタリングシステム」
<https://jasmai.maff.go.jp/>

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥懸念、中国の輸入需要の増加等により、大豆、とうもろこしを中心に上昇。コメは、2013年以降低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇。同年4月末の輸出枠の解除等で下落も、依然として高止まり。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



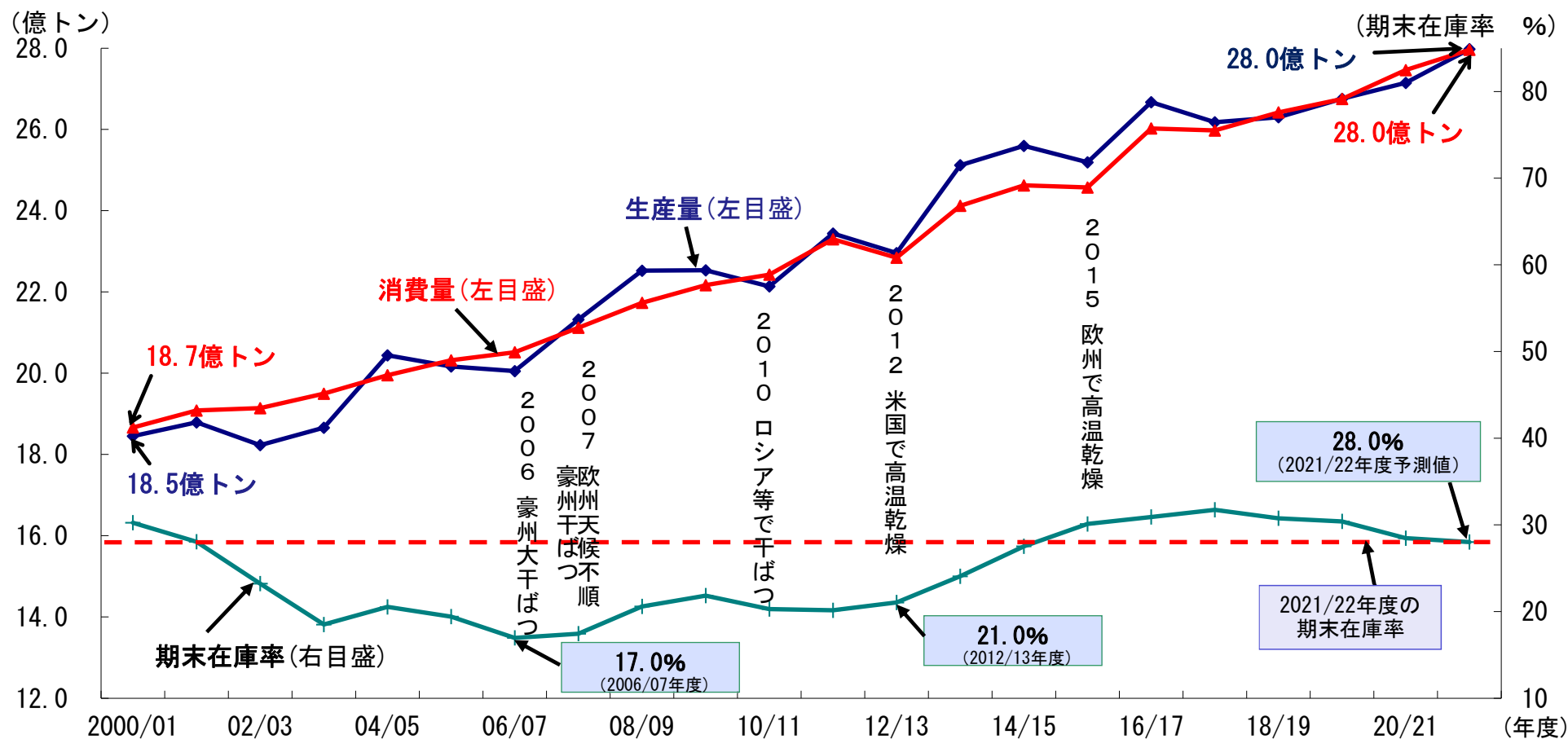
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より低下し、28.0%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(June 2021)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和2年12月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和2年12月～令和3年5月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R2	R3					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前年 同月比)
生鮮食品を 除く総合	99.7	100.2	101.0	101.7	101.5	101.1	101.4	101.5	101.8	101.5	101.7	0.1%
食パン	101.1	100.9	101.4	102.3	101.2	100.4	100.4	100.2	99.9	100.5	99.5	-1.6%
即席めん	100.0	99.5	99.0	102.4	103.9	102.8	104.1	104.4	104.0	105.1	103.6	-0.2%
豆腐	100.0	100.5	100.7	101.0	101.9	102.9	102.4	102.7	103.0	102.9	103.0	1.2%
食用油 (キャノーラ油)	97.8	94.5	93.3	92.8	92.0	91.0	91.3	91.0	90.3	90.8	91.3	-1.7%
みそ	99.4	99.1	99.6	101.4	102.3	100.5	101.2	102.0	102.5	102.1	102.3	-0.5%
チーズ	99.3	98.8	102.6	102.9	101.7	100.7	101.4	102.0	101.2	101.9	99.3	-0.6%
バター	101.5	101.7	102.0	102.3	102.4	102.3	102.3	102.4	102.2	102.3	102.3	0.1%
マヨネーズ	98.1	96.7	95.3	95.1	94.5	93.2	93.8	94.6	94.8	94.1	94.9	-0.4%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和3年1月～令和3年6月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)													
	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.9	99.5	99.8	103.2	101.9	101.2	101.6	101.6	100.5	99.9	100.3	0.4%	-1.6%
即席めん	99.8	99.6	99.5	105.3	107.6	106.5	107.2	107.2	107.2	107.2	107.2	0.0%	-0.7%
豆腐	96.9	95.6	95.0	95.7	94.8	94.7	96.3	93.9	93.4	94.3	95.1	0.9%	-0.4%
食用油 (キャノーラ油)	96.3	94.6	94.6	100.1	96.7	95.0	94.0	93.7	95.6	95.0	96.8	1.9%	-0.3%
みそ	99.8	101.6	106.8	111.0	110.5	109.4	111.0	109.9	108.7	109.9	110.3	0.4%	-0.3%
チーズ	100.0	99.7	103.2	105.7	104.8	104.8	105.8	104.8	103.8	103.2	97.5	-5.5%	-5.0%
バター	101.3	102.0	102.3	102.7	103.3	103.4	103.2	103.4	103.0	102.7	103.0	0.2%	-0.4%
マヨネーズ	99.2	98.4	97.2	102.4	99.3	98.3	98.3	98.0	96.9	96.9	98.3	1.4%	-1.0%

資料: 農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和3年1月の調査は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で、2月の調査は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、大阪府、京都府、兵庫県、愛知県、岐阜県、福岡県で、3月は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で、5月は東京都、大阪府、京都府、兵庫県、6月は東京都、大阪府、京都府、兵庫県、愛知県、福岡県、北海道、岡山県、広島県、沖縄県で調査を中止したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。

また、令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県で、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県で調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。